

誘いに対する断り表現について

清水勇吉ⁱ・趙 塔娜ⁱ・ビクトリア・ブロイヤーⁱⁱ

1. はじめに

他人とコミュニケーションをとる上では相手からの依頼や誘いを断る際に、人間関係を円滑に保つため様々な工夫を凝らす必要がある。尾崎 (2006) に「関係維持と意図の伝達の両方に配慮が求められる言語行動のひとつ」とあるように、関係維持はもちろんのこと、それを踏まえた上で明確にこちらの意図を伝えなければ、相手に「断り」とみなされないおそれもある。その点が「断り」表現の難点である。

相手に触れないようにするなど、回避的に相手との距離を置こうとするものをネガティブ・ポライトネスという。反対に、相手に共感しようとするなど、自分と相手との距離を縮めようとするのが目的であるものをポジティブ・ポライトネスと呼ぶ。断り表現は、自身の領域に踏み込まれる点においてはネガティブ・フェイスⁱⁱⁱを侵害されるものであるが、同時に、相手の好意や誘い、また依頼を拒否・拒絶するという点において相手のポジティブ・フェイスを侵害してしまうために、心的負担の大きなものとなる。加えて上に述べたような難しさもあるために、どのような方略を用いて「断り」を表現するのかを知ることは多分に有意義であると言える。

例えば仕事を依頼されたときに「無理だ」と一言で済ますか「申し訳ありませんが、今は立て込んでおりまして」や「私にはもったいない話です」などと婉曲的に表現するかでは、相手に与える印象が大きく変わってくる。単に一言ではただの拒否の表明でしかないが、謝罪を一言入れたり婉曲的表現をとることによって今後の人間関係をも維持させようという意味があらわれるのである。

「断り」に関する研究自体は散見されるが、依頼に対する断りに関するものであることが多く、誘いに対する断り表現は未だ多くはないように思われる。本研究では大学生を調査対象とし、誘いに対してどのような断り表現を用いるか、またその表現は相手の属性・自分との関係性によってどの程度の差がみられるのかを中心に考察を進める。

2. 調査方法

大学生を対象として依頼場面を設定したアンケート調査を行い、提示した状況の中でどのような表現をするかを想定して回答してもらった。調査は2008年10月から11月の2ヶ月にかけて実施した。

2. 1. 調査場面

断り場面の状況設定においては、表現方法の選択に影響を与えらると思われる「親疎関係」を中心に、日常で起こり得る場面を設けた。以下に挙げるのが調査に使用した質問文である。

テスト期間も明けて、ある人から突然飲み会に誘われました。しかし今日はどうしても外せない用事があります。

この場面において、“仲の良い同性の友人”“仲の良い異性の友人”“同性の先輩”“異性の先輩”“同性の後輩”“異性の後輩”の6種の相手を設定し、まず誘いを断るかどうか、そして断る場合はどのように言うか、またその際にどの程度気を遣うかについて質問した。どの程度気を遣うかという評価の方法は、「1. 非常に気をつかう 2. わりと気をつかう 3. 少しは気をつかう 4. あまり気をつかわない 5. まったく気をつかわない」からの選択式とした。

相手の設定において、友人にのみ“仲の良い”を付け加えているのは、先輩や後輩といった一般的に親疎関係の疎である相手との、心理的距離における差別化を意識したためである。

2. 2. 調査対象

地 域	回答者数 (男性)	回答者数 (女性)	合計
北海道・東北(北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島)	1	1	2
関東(茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・山梨・東京・神奈川)	4	2	6
信越・北陸(新潟・富山・石川・福井・長野)	1	1	2
東海(静岡・愛知・岐阜・三重)	5	2	7
近畿(滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山)	51	38	89
中国(鳥取・島根・岡山・広島・山口)	27	13	40
四国(徳島・香川・愛媛・高知)	63	58	121
九州・沖縄(福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄)	9	5	14
合 計	161	120	281

表 1 被調査者の出身地

調査対象は、全員 20 歳前後の徳島県の大学に通う日本語母語話者の大学

生・大学院生とした。有効回答数は 281 で、以下に被調査者の出身を示す。被調査者の出身地に偏りが見られたため、今回は地域差を問題としない。

3. 分析結果

3. 1. 自由回答記述

3. 1. 1. 分析方法

データの分析方法に関しては蒙（2010）の意味公式の分類を参考にした。回答をそれぞれの意味機能に分解・分類することで、断りに際してどのような表現を用いているかをより細かく分析するためである。ただし今回、分析の際に「言いさし」に分類されるものを、内容によって他の意味公式として扱った。「言いさし」の出現頻度の少なさと、それで十分にそれぞれ他の意味公式に分類可能な意味を有しているとの判断による。また、蒙（2010）では「詫び」が繰り返された場合すべて数えているが、本稿ではそれ自体あまりみられなかったため、繰り返しがあつた場合にも配慮度の高い表現を採用して 1 とカウントしている。山岡ほか（2010）では「断り」について「典型的な FTA の一つ」としている。

本稿では分類した意味公式のうち、特に出現頻度の高かった「共感」「詫び」「理由」「結論」「関係維持」の五つに焦点を当てて考察を行うこととする。さらに蒙（2010）では、相手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスのどちらに配慮するかにより「共感」「理由」「関係維持」をポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下、PPS）、「詫び」をネガティブ・フェイスに配慮したネガティブ・ポライトネス・ストラテジー（以下、NPS）、「結論」を配慮ゼロとした。本稿ではこれに従って考察するものとする。

意味公式	意味機能
共感	相手の意向に添いたい心情の表明
理由	相手の意向に添えない旨の表明
詫び	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明
結論	直接的な表現の断り
関係維持	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ

表 2 意味公式の分類（蒙・2010、抜粋）

本節では作図^{iv)}における簡略化のために、断る相手の性別には言及しない。

3. 1. 2. 丁寧表現

日本語記述文法研究会編(2009)には敬語を「同じ事態を述べるのに、述べ方を変えることによって、話題の人物への敬意やへりくだり、聞き手や発話の場面への配慮といった、上向きの待遇意図を表す専用の表現」としており、そのうち対象敬語である丁寧語の使用に焦点を当てる。

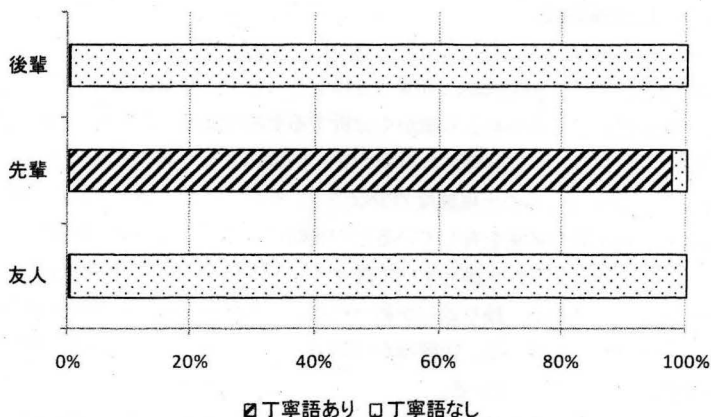


図 1 回答中の丁寧語の有無

【友人】と【後輩】からの誘いを断る際には「用事があるから行けないわ」「無理なんだ」等の表現が多く、回答のほとんどに丁寧語はあらわれなかった。それに対して、【先輩】の誘いを断る際には「用事が出来たのでいけないんですよ」「用事があるので参加できません」等の表現が多くあらわれ、丁寧語を用いた割合が 90%以上と、【友人】【後輩】とは明らかな差が見られる。丁寧語使用に関してのみ言えば、【友人】と【後輩】の間に差はみられず、またその両属性と【先輩】では、丁寧語を使用することで差別化をはかっていると考えられる。

滝浦(2008)は敬語について「対象の他者性を標しづけることで“あちら側”と“こちら側”の間に一線を引く点は、「尊敬語」も「謙讓語」も変わらない。このいみで、敬語とは“他者の標し”なのである」と述べている。さらに丁寧語は分離して発達したとあるが、この断りの場面での丁寧語も他者と距離を置くために使われているのではないかと捉えると、先輩に丁寧語が使われたのは社会的・心理的距離が大きいために、お互いの距離をとるため

の配慮がなされたからだと考えられる。この丁寧語での断り表現は、敬避的配慮と思われる。

3. 1. 3. 「共感」

蒙 (2010) では「共感」を「相手の意向に添いたい心情の表明」としている。表現の中に「共感」を加えることで「断りはするものの、本当は自分（話し手）はあなた（聞き手）の依頼・勧誘を素直に受けたい」ということを示すことができ、同時に配慮の態度も示すことができる。

ここでは配慮表現としての「共感」がどのように使い分けられているかを相手別に比較する。

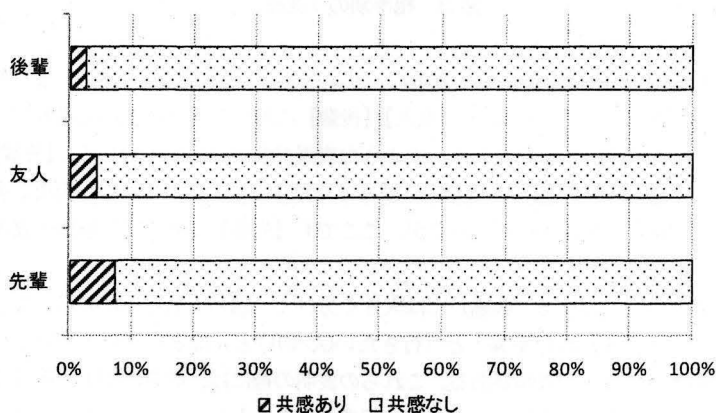


図 2 「共感」の有無

図 2 を見ると、全体の「共感」の使用頻度は決して高くはないが、【後輩】【友人】【先輩】の順に使用頻度が高くなっている。クロス表の残差分析を行った結果、回答全体の「共感あり」のうち【先輩】に対するものが 51.9%、【後輩】に対するものが 17.7% (いずれも $p < 0.01$) で、比重を考えると、「共感」の使用傾向として【先輩】にはよく用い、【後輩】にはあまり用いないことが言える。本来直接的に「行けない」などと断れば目的は達成されるにもかかわらず他の意味機能を用いるということは、他の相手よりも【先輩】に配慮する必要があるという証左ではなからうか。その点で【後輩】よりも社会的・心理的距離を【先輩】に対して感じていると言える。

次に、「共感」として用いられた表現のバリエーションに注目する。

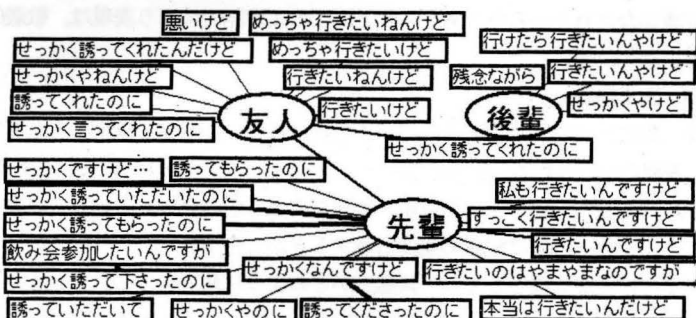


図3 相手別の「共感」

断る際の【先輩】に対する表現のバリエーションが【後輩】【友人】より明らかに多様である。そして、【友人】【後輩】に対して「行きたい(んや)けど」「せっかく誘ってくれたのに」のような表現が多かったのに対して、【先輩】には「私も行きたいんですけど」「誘ってくださったのに」といった表現が多い。前節で丁寧語の使用をみたが、ここでも【先輩】に対して丁寧語の表現が多いことが分かる。

またここにおける「共感」には大きく分けて「誘ってもらったのに」などの「相手に誘われた事実」と「行きたい(んや)けど」などの「行きたいという願望」の二つの表明がある。これらの表明の裡には、前者に相手、後者に自身の存在がそれぞれ隠れている。配慮の度合いとしてどちらが高いかは、言うまでもなく前者であろう。図をみると、【先輩】には「せっかく誘っていただいたのに」「せっかく誘ってもらったのに」といった“相手に誘われた事実”をあらわすものが多い。このように表現形式の性格からも配慮の度合いの差をみることができる。

3.1.4.「理由」

蒙(2010)では「理由」を「相手の意向に添えない旨の表明」としている。「理由」は「理由があるために自分(話し手)があなた(聞き手)の依頼・勧誘を断らなければならない」ということを示すものであり、説明を加えることで聞き手のポジティブ・フェイスを保とうとする意識のあらわれである。

ここでは配慮表現としての「理由」がどのように使い分けられているかを相手別に比較する。

「理由」の使用頻度に関してはほとんど差がみられなかったため、各表現

を分類することで考察を行う。各表現を以下のとおり分類した。

「あります」類	用事があります、用事がありまして、など
「ある」類	用事がある、用事あるんよ、用事があって、など
「あるけん」類	用事があるけん、用事があるきん、など
「あるから」類	用事があるから、など
「あるので」類	用事があるので、用事があるんで、など

表3 「理由」の類型

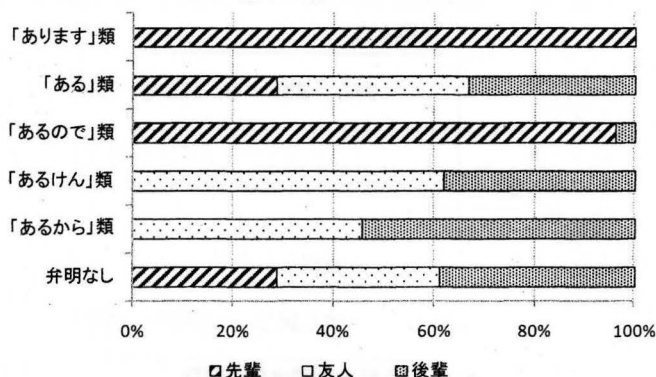


図4 「理由」

発話中に「理由」のなかったものに関しては特に相手による差はみられませんが、それ以外の、分類した表現には明確な差がみられた。「弁明なし」以外の分類は、「(理由)が～」に続く部分である。

「あるから」類、「あるけん」類、「あるので」類の三つは、原因・理由をあらわす接続助詞を有するものであり、使用状況に違いがみられる。特筆すべきは「あるので」類のみ【先輩】に対する使用が目立つことである。永野(1988)の調査結果によると、接続助詞「から」と「ので」どちらを用いるかというアンケートにおいて「ので」の使用頻度が高かったのは丁寧表現の例文に入れるものであった^{vi}。これより接続助詞「ので」には単純に原因・理由をあらわすもの以外にも待遇的用法が考えられ、故に【先輩】に対する使用頻度が高くなったものと思われる。

「ある」類と「あります」類も、丁寧表現たる後者が【先輩】に多く用い

られるのはもちろん、前者の【先輩】に対する使用頻度が低くないのも「用事があって」などの説明的表現がそのほとんどを占めている所以である。この両分類において特別【先輩】に常体が多いということにはならない。

3. 1. 5. 「詫び」

蒙 (2010) では「詫び」を「相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明」としている。いわゆる謝罪表現である。山岡 (2010) では謝罪表現の語用論的条件として「話者Sが聴者Hに不利益を与えている」を挙げており、相手の誘いに乗らないことが不利益と考えられるためここで「詫び」を謝罪表現と見做しても問題はないと思われる。同書では謝罪表現を四つの系に分類している。以下に引用する。

〈遂行〉系 (直接型)	謝る, 謝罪する, 詫びる, 陳謝する
〈命令〉系 (許しを求める型)	ごめんなさい, お許ください, 勘忍して, あしからず
〈描写〉系 (過ちを認める型)	すみません, 私が悪い, 迷惑をかけた, 失礼しました
〈表出〉系 (心情を告白する型)	申し訳ない, 恐縮だ, 遺憾だ

表 4 日本語の謝罪表現の類型

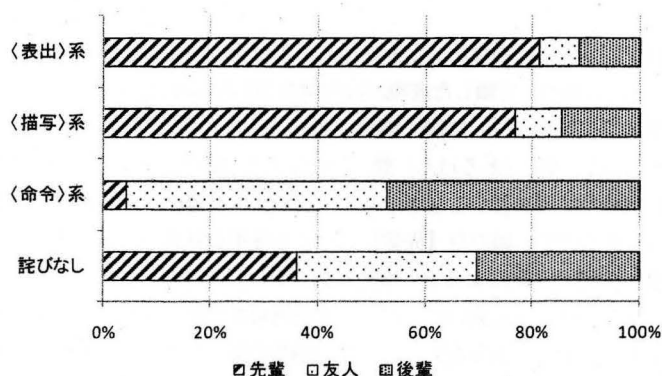


図 5 「詫び」

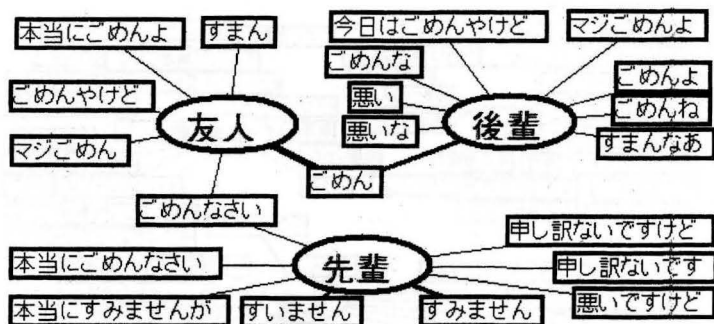


図6 相手別の「詫び」

山岡ほか(2010)の分類に従い、調査結果にみられた「詫び」表現を〈命令〉系、〈描写〉系、〈表出〉系に分けて考察することにした。

まず、「詫び」を用いるか否かは相手の別によるものではないらしいことが分かる。形式に関して言えば、「ごめんなさい」などの〈命令〉系が【友人】【後輩】に、「すみません」などの〈描写〉系、「申し訳ない」などの〈表出〉系が【先輩】に対してそれぞれ多く用いられている。

【友人】【後輩】に〈命令〉系が多かった理由として考えられるのは、【先輩】と比して配慮の必要性が低いために、また変異形たる「ごめん」の使用頻度の高さ(図6参照)故だと考えられる。

3.1.6.「結論」

蒙(2010)では「結論」を「直接的な表現の断り」としている。つまり拒否の意思の表明である。「言いさし」やその他の婉曲表現でない限り、この意味機能を有するものを加えなければ「断る」という目的が達せられないおそれがある。

回答中の「無理」や「パス」といった語はそれ単体で「断り」をあらわすことが可能だが、「行けない」よりは間接的表現と言える。そういった間接的表現を用いることは相手に対する信頼のあらわれととることができ、親疎関係で言えば親しい相手にこそ用いられるものである。その点において【友人】に対する回答として「今日は無理や」などの表現が多くみられることは妥当なことであろう。逆に「行けません」といった直接的な表現は【先輩】

【後輩】に多く、相対的に【友人】よりは親しさが低いととれる。自身の「相手の申し出を断る」という目的を優先させたものと考えられる。

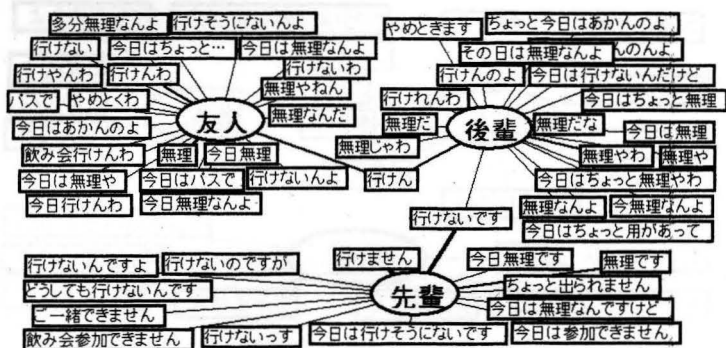


図 7 相手別の「結論」

3. 1. 7. 「関係維持」

蒙 (2010) では「関係維持」を「相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ」としている。単純に断るのではなく、次の機会を思わせることによって相手に「条件が異なれば (別の機会など) 可能であるから、今後も依頼・誘いを行っても構わない」という態度を見せるものである。

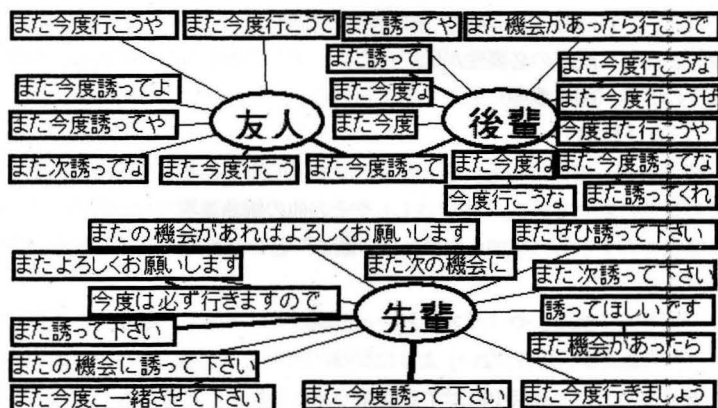


図 8 相手別の「関係維持」

図 8 を見ると、【先輩】に「また(今度)誘って下さい」が、【友人】【後輩】に「また今度誘って」がよく回答されていることから、丁寧語使用の有無以外に特に差はないものとも思われるが、その他の形式から傾向をみる事が

できる。【友人】や【後輩】への回答には「また今度行こう」など、「ともに参加すること」に主眼を置いた回答が散見されるが、【先輩】に対しては「またぜひ誘って下さい」など「自身が誘われること」を前提とした回答が多く、誘った相手の面子を立てることを意識している。断った相手に対してもう一度誘う機会を与えることはつまりポジティブ・フェイスに配慮した行動と言える。ただし【友人】【後輩】に配慮がないという訳ではなく、こちらから近づいていくという点において相手のポジティブ・フェイスに配慮しており、あくまで単なる手段の相違である。

3. 2. 回答者の性、相手の性

男性と女性の使うことばは違う。例えば、自分のことを「俺」や「僕」という女性はほとんどいない。

この例からもことばにはジェンダーがある、ということがわかる。日本の歴史に目を向けると、日本は古くからことばとジェンダーを結びつけてきた。万葉集は男性的な「ますらをぶり」、古今和歌集は女性的な「たをやめぶり」と言われ、表現にも「男性らしさ」「女性らしさ」を見出している。女流文学の先駆けといわれる紀貫之も「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と男性ながら女性として土佐日記を記している。

女性特有のことばづかいには「女ことば」と呼ばれ、日本においてはジェンダーとことばの関係は非常に馴染み深いことがわかる。海外では、1975年にロビン・レイコフの発表した『言語と女性の場』にてはじめてジェンダーとことばの関係を意識した研究が出ることで、英語圏でもジェンダーとことばの関係性について考えられるようになった。

それらの研究では「女の言語」に着目し、女性は男性より極度に丁寧な表現を使うなどの結果が得られており、これは英語だけではなく他の言語においても同様であることが明らかになった。つまり、言語・文化が違っても、「女の言語」は男性の使うことばより丁寧である、ということである。本節では、断る場合の“気をつかう度合い”（以下、配慮評価と呼ぶ）を中心に、先行研究のように男女で回答に差がみられるかを探る。

3. 2. 1. 配慮評価

配慮評価については、断る相手の違いによる気の遣い方を数値で評価してもらった。今回は断る場合のみの数値を考察に採用する。よって、本稿の“気を遣う”というのは、「断り」においてどれだけ気を遣うかということである。

以下、会話相手の同性の友人を【同友】、異性の友人を【異友】、同性の先輩を【同先】、異性の先輩を【異先】、同性の後輩を【同後】、異性の後輩を【異後】と呼称する。

冒頭にも述べているが、相手からの誘い（行為要求）を断る（拒否する）のは、多分に配慮の必要があり同時に気を遣うことが多い。その観点から、断る時の発話とともにどの程度気を遣うかを調査した。ここでは主に相手の性別によるもの、相手との上下関係によるものという二つの視点から比較を行った。

設定した選択肢を「1. 非常に気をつかう 2. わりと気をつかう 3. 少しは気をつかう 4. あまり気をつかわない 5. まったく気をつかわない」としているため、選択した数値が小さければ小さいほど相手に対してより気を遣っていると言える。図9を見ると、【同先】【異先】で他の属性ではあまり回答の多くない1が突出しており、同時に5がほとんど出現していないことが分かる。これのみでも、先輩に対して気を遣う傾向にあると判断することができる。また、【同友】・【異友】、【同先】・【異先】、【同後】・【異後】がそれぞれ類似していることから、全体的な傾向として相手が同性であるか異性であるかはあまり関わりがないと考えられる。

併せて表5を見る。配慮評価の値の平均を男女別に算出した。もちろん気を遣う度合いの5段階評価はあくまでも順序尺度の数値であり、数字そのものに絶対的な意味はない。しかし相対的な比較という面では有効ではあると考える。

男女を比較すると、【異友】以外ではほぼ女性の方が相手に気を遣う傾向にあると言えそうだ。ただし、【異後】においては数値的な差が僅少であるため、明確な男女差があるとは言い難い。「依頼」表現に焦点を当てて同様の調査を行った清水（2010）^ⅳにおいては、配慮評価の側面においては相手との上下関係に左右されることなく女性の方が気を遣い、また表現形式においては相手の性別、上下関係にかかわらず女性がより丁寧な表現を用いるという報告がなされており、配慮評価の結果が本テーマとは若干異なっている。場面としては「飲み会の誘いを断る」ものであるが、一般的に女性が男性を誘うよりは、その逆の方が想像しやすい。その点において女性は男性よりもその場面を想定しやすかった可能性がある。そこに【同友】【異友】における男女差が生じたのではないかと考えられる。

参考として「依頼」場面の配慮評価の平均を表6に挙げている。フェイス

理論において、相手のネガティブ・フェイスを侵害する「依頼」と、相手のポジティブ・フェイスへの補償を必要とする「断り」では、要求されるものの質が異なる。前者は自身の要求する行為を遂行してもらうために配慮を必要とするが、後者は明確な拒否・拒絶の表明をするために、相手への面子を潰すことにもなりかねない。ゆえに相手視点に立った配慮を必要とする。しかし全体的な比較を行った場合、本調査においては場面ごとに配慮評価に大きく差をつけるといったことはないようだ。

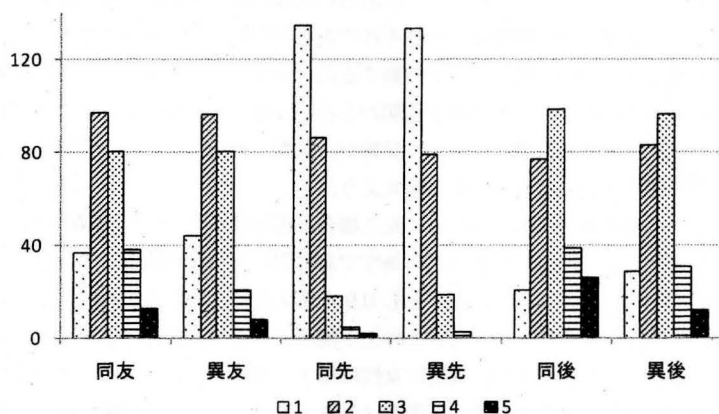


図 9 配慮評価の数値

	同友	異友	同先	異先	同後	異後
全体	2.58	2.39	1.58	1.54	2.86	2.64
男性	2.69	2.38	1.66	1.62	3.03	2.64
女性	2.48	2.45	1.51	1.48	2.72	2.67

表 5 配慮評価の平均

	同友	異友	同先	異先
全体	2.59	2.43	1.58	1.54

表 6 「依頼」場面の配慮評価の平均（参考、清水(2009)より抜粋）

配慮評価そのままの数値を羅列するのみでは不十分と考え、回答の傾向をより多角的に見るために相手別にそれぞれ標準分散ⁱⁱⁱを算出した。

表7を見ると、同性、異性にかかわらず先輩への値が小さく、回答のばらつきが少ないことが分かる。つまり、回答が集中しているのである。特に女性はその傾向が強い。回答が集中するということは「回答者の性格によって気の遣い方に差が出る」といった可能性が小さいことを意味している。

反対に標準分散の値が最も高いのは男性の【同後】、次いで男性の【同友】であった。あくまでも相対的にはあるが回答にばらつきがあると言え、どの程度気を遣うかの判断は人それぞれであると判断することができる。

配慮評価の分散の値の大小から察するに、少なくとも先輩に対しては配慮評価の基準に相手の性別が大きく関わるといったことはないようだ。“上下関係で上に位置される相手”という要素が、同性、異性にかかわらず画一的な回答を促すものになっていると言えよう。

また、回答者の性別に注目して見た場合、男性は女性よりも回答のばらつきが大きい。女性が、相手がどの属性であれ同じような回答をしている（と判断できる）ことに加え、高くとも0.9を超えないことからすれば、ここにおいて男性は相手の性別、相手との上下関係によって気の遣い方を大きく変えると言うことができる。反対に女性は相手の属性に左右されることが少ないとも言える。ただし女性でも先輩に対する場合と、友人、後輩に対する場合とでは差別化をはかっていると思われる。

	同友	異友	同先	異先	同後	異後
全体	1.1	0.96	0.61	0.54	1.15	0.99
男性	1.28	1.07	0.62	0.6	1.33	1.13
女性	0.84	0.81	0.58	0.45	0.87	0.82

表 7 配慮評価の標準分散

3. 2. 2. “断らない”

本稿のテーマは「断り」であるが、各設問の場面を想定した場合、回答として“断らない”という行動を選択することも十分に考えられるし、またより現実に即した状況を想定してもらうときには、この選択肢は不可欠なものであると考える。

では、「断らなければならない理由があるにもかかわらず、相手からの誘い

を“断らない”という選択にはどのような意図が隠れているか。状況としては断るのが一般的であろうし、実際に“断る”との回答が圧倒的多数である。前述したように、“断る”という言語行動は相手からの行為要求を拒否するために相手への配慮を必要とする。それゆえその際の表現形式やまた非言語行為にまで種々の工夫を加えなければならない。それらをまとめて回避する手段として、要求を受け入れる、すなわち“断らない”という選択を行うのである。自身の現状を行動の選択に踏まえずに相手の行為要求を受容するという点において、選択肢“断らない”は、最も配慮の度合いが高いと判断しても過言ではない。ただし“断らない”という回答自体は全体から比べれば少ない。「断らなければならない理由」を優先させるのが一般的と言えるかもしれない。

図10は相手別に“断らない”を選択した人数をグラフ化したものである。最も配慮を必要とするだろうとされる先輩に対しては、“断らない”とする回答がやはり多い。男女別に見ると、女性の“断らない”回答そのものが少ないことも相俟って、男性がよく相手の誘いを受け入れると言えそうである。

しかし統計的に見た場合はどうであろうか。

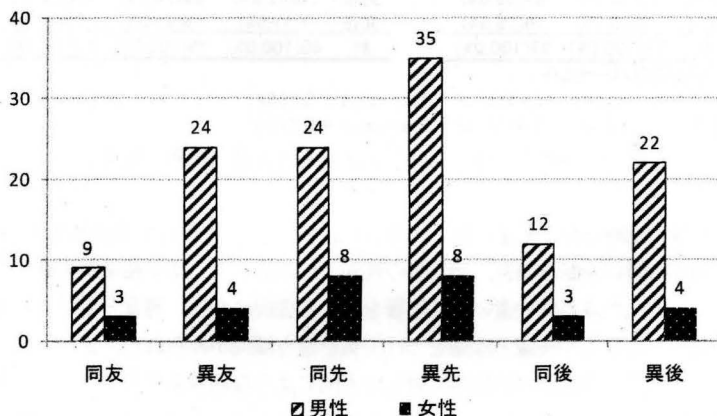


図10 相手別“断らない”を選択した人数（男女別）

図10に関して、男女別に分けて独立性の検定²⁾にかけたものが表8である。統計学的観点から言えば、p値(p-value)が0.05未満(または0.01未満)のときに有意に差があるという。この表にあるp値は0.05よりはるかに

大きいために、有意差はない、つまり“断らない”という選択は性別によるものではないと言える。

また、相手の性別（男女）、属性（友人か先輩か後輩か）を一まとめにしたものも同様に独立性の検定にかけた（表9）。p値を見ると、上下関係はもちろんのこと、相手の性別によるものも統計的に有意に差があるとは言えない。つまり、どの属性であれ、男女差を生じさせる要因たりえないということである。もちろん回答数としては男性が過半数を占めているため、男女差が全くないとは言い難いため、男性は女性よりも“断らない”とする傾向があるようだと言べるに留めておく。

	同友	異友	同先	異先	同後	異後
男性	9(75.0%)	24(85.7%)	24(75.0%)	35(81.4%)	12(80.0%)	22(84.6%)
女性	3(25.0%)	4(14.3%)	8(25.0%)	8(18.6%)	3(20.0%)	4(15.4%)
計	12(100.0%)	28(100.0%)	32(100.0%)	43(100.0%)	15(100.0%)	26(100.0%)

()内は列のパーセント。(chi-square = 1.6479, df = 5, p-value = 0.8954)

表 8 相手別“断らない”を選択した人数

性別	同性	異性	属性	友人	先輩	後輩
男性	45(76.3%)	81(83.5%)	男性	33(82.5%)	59(78.7%)	34(82.9%)
女性	14(23.7%)	16(16.5%)	女性	7(17.5%)	16(21.3%)	7(17.1%)
計	59(100.0%)	97(100.0%)	計	40(100.0%)	75(100.0%)	41(100.0%)

()内は列のパーセント。

性別: (chi-square = 1.2360, df = 1, p-value = 0.2662)

属性: (chi-square = 0.4135, df = 2, p-value = 0.8132)

表 9 相手別“断らない”を選択した人数（性別、属性）

本項では断る際の配慮評価と、“断らない”とする回答に焦点を当てた。

相手の誘いを断る場合、回答者の性別にかかわらず、まず相手が先輩かどうかといった点が気の遣い方に影響を与える要因になる。男女ともに、先輩に対しては友人や後輩とは差をつけて気を遣う傾向がみられた。また、男女差としては、女性がどの相手に対しても同じような回答するのに比べ、男性は特に友人、後輩に対して、相手の性別によって気の遣い方にばらつきが生じた。女性と比較した場合、男性がどの程度気を遣うかは相手の性別に左右されやすいと言えよう。

また相手の誘いを受け入れ、配慮の度合いが高いとされる“断らない”とする回答に関しては、男性の回答が多かったが、統計的に有意な差があるとは言えなかった。

3. 2. 3. 謝罪表現

最後に、より性差が顕著であった「ごめん」などの謝罪表現について記す。
また本項は**3. 1. 5.**とは意を異とするものである。

相手を【先輩】【友人】【後輩】と別個にみていく。また、作図のために謝罪表現のそれぞれを類にまとめた。

ごめん類：ごめん／本当にごめん 等

ごめんなさい類：ごめんなさい 等

すまん類：すまん 等

すみません類：すいません／すみません 等

申し訳ない類：申し訳ない／申し訳ありません 等

悪い類：悪い／悪いけど／わりけど 等

また、謝罪表現が使われていない場合は「無し」で示される。

3. 2. 3. 1. 【友人】

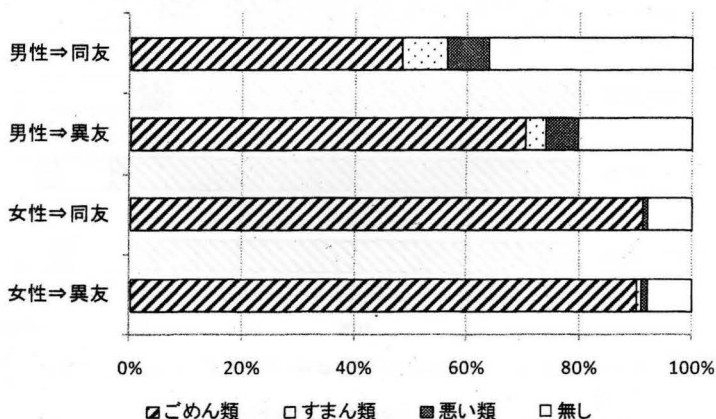


図 11 【友人】への謝罪表現

謝罪表現を用いることで断ることにに関して相手に「自分は負担に感じている」という意思をあらわすことができる。「無し」の占める割合から、女性に比して男性はそういった配慮を発話の中で行わないととれる。

また形式面で言えば、「すまん類」「悪い類」は男性でよくおこなわれているが、女性の回答からはほとんどみられない。同時に男性から【異友】に対する回答でもその出現頻度が低くなっていることから、これら二つの形式は

女性と相性が良くないという点においていわゆる「男ことば」とすることができよう。女性は回答のほとんどが「ごめん類」であり相手の性別に特に左右されている様子はないが、反対に男性は明らかに相手の性別で表現に差をつけている。

3. 2. 3. 2.【先輩】

男女ともに、相手の性別による差がみられる、といったことはない。ただし、男性は【同友】と比して【同先】にも謝罪表現の使用頻度を上げており、ここに明確な配慮の態度がみられる。

女性は男性よりも「ごめんなさい類」を用いており、男性の「すみません類」の使用頻度が高いことも相俟って、相対的に女性は【先輩】に対して親しみを示していると言えよう。つまり男性は「遠隔化」を、女性は「近接化」をそれぞれはかっているとも言える。

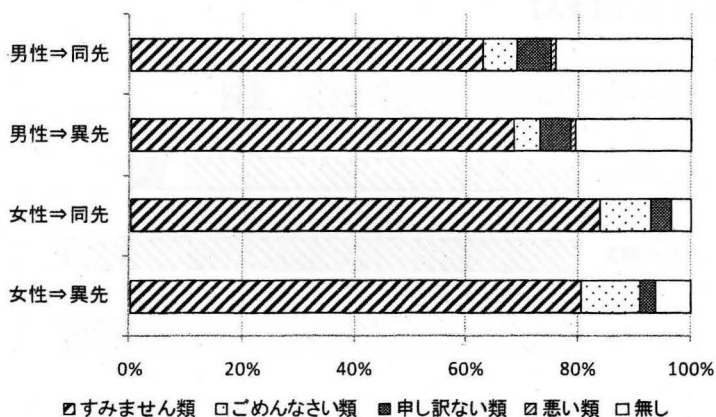


図 12 【先輩】への謝罪表現

3. 2. 3. 3.【後輩】

図の形としては図 11 とあまり変わらないが、男女ともに「無し」の割合が減少している。この点において言えば、配慮の必要性を感じているとして【友人】が最も社会的・心理的距離が小さいと判断できる。

形式面に関して言えば、女性はその回答のほとんどを一般的な「ごめん類」で済ませている。反対に男性はここでも相手の性別による差別化をおこなっている。また他のどの相手よりも丁寧な表現とは言い難い「悪い類」「すまん

類」を多用している。

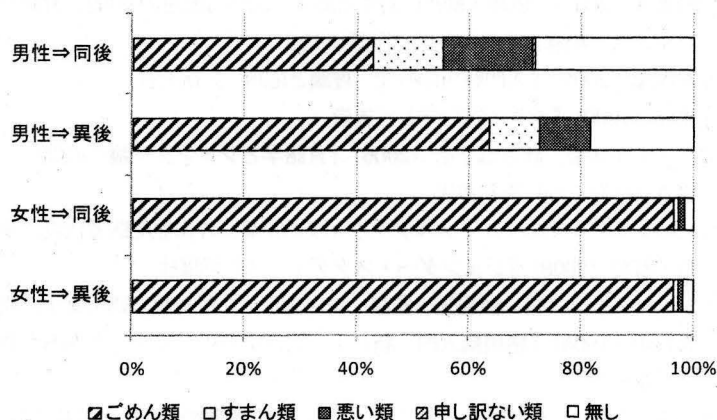


図 13 【後輩】への謝罪表現

以上の結果から、男性は特に上向きの上下関係を重視し、女性は相手の性別にかかわらず画一的な表現を用いる傾向があると言える。

4. おわりに

本稿では主に形式、配慮評価の両面から、相手の属性による差をみた。

どちらの面からも、特に【先輩】に対する回答に【友人】【後輩】とは異なる傾向がみられ、【先輩】に最も配慮した社会的・心理的距離を感じていることが見出せた。

また、男女差がみられたのは、回答者の性別であった。形式、配慮評価ともに、男性は相手の性別による差別化をはかり、反対に女性は相手の性別が回答に大きな差を与えるということとはなかった。つまり男性は相対的に異性を特別視し、女性はどの相手に対してもなるべく差をつけない態度を示していることが分かった。

調査結果により、「誘い」に対する「断り」の方略は実に多様で、話し手自身、また相手の属性による差が生じることが確認できた。今後は「誘い」の内容の違いによる差が生じるのか、またどのようにあらわれるのかという観点も含めて調査・考察を行いたい。

参考文献

- 尾崎喜光 (2006) 「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所
- 小泉保編 (2001) 『入門語用論研究 - 理論と応用 - 』研究社
- 小泉保 (1990) 『言外の言語学』三省堂
- サラ・ミルズ著, 熊谷滋子訳 (2006) 『言語学とジェンダー論への問いー丁寧さとはなにか』明石書店
- ジェイン・ピルチャー, イメルダ・ウィラハン著, 片山亜紀訳者代表, 金井淑子解説 (2009) 『ジェンダー・スタディーズ』新曜社
- ジェニー・トマス著 浅羽亮一監修 田中典子, 津留崎毅, 鶴田庸子, 成瀬真理訳 (1998) 『語用論入門 - 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味 - 』研究社
- 清水勇吉 (2009) 「依頼表現に見るポライトネス-性差のかかわりを中心に-」『徳島大学国語国文学 第 22 号』
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
- 永野賢(1988)「再説・「から」と「ので」はどう違うかー趙順文氏への反批判をふまえてー」『日本語学』第 7 巻第 12 号 明治書院
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』勁草書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法 3』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 7』くろしお出版
- 飛田良文ほか編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 元智恩 (2005) 「日韓の断わりの言語行動の対照研究: ポライトネスの観点から」筑波大学博士(言語学)学位請求論文

i 徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程

ii 徳島大学総合科学部

iii 他者に押しつけられたくない・踏み込まれたくないという欲求。反意語はポジティブ・フェイスで, 他者に認められたい・よく思われたいという欲求。それぞれネガティブ・ポライトネス, ポジティブ・ポライトネスと対応する。

iv 図 3, 6~8 のネットワーク図を指す。キーワード同士をつなぐ線の太さに各語の関連度の強さがあらわれている。

- v 独立性の検定において有意差がみられたクロス表中のどのセルの比率が有意に高いのか、ないしは低いのかを分析する。
- vi 丁寧表現の例文の一つを挙げる（例文中の括弧に「から」「ので」のいずれかを入れるものである）。「そのことは伺っておりません（ ）私にはわかりかねます」
- vii この調査における相手の設定は【同友】、【異友】、【同先】、【異先】のみである。
- viii いわゆるサンプルの散らばり具合。0を最小とし、数値が大きければ大きいほど回答の多様性がみられる。標準分散が0の場合は、その集団（回答群）が全て同じものであることを意味する。
- ix 表側と表頭の間には何らかの関係がないとは言えない（つまり関係がありそうと言えるだろう）とする検定。